Essay

戊辰戦争とシーボルト

福島県立医科大学外科学第二講座　竹之下誠一

はじめに

福島に赴任してからちょうど1年が経過した．短い期間ではあったが，多くのすばらしい人たちとお会いし，新たな絆ができた．親しくおつきあいさせていただくうちに「先生も福島では大変でしょう」と親身から心配していただく機会を何度も経験した．私が鹿児島出身と気づかれた時点で皆さんつぶやかれるのである．私は昭和26年3月10日鹿児島で生まれ，県立鶴丸高校を卒業する18才まで鹿児島で過ごした．群馬大学医学部に入学し卒業後群馬大学第一外科に入りちょうど30年群馬で過ごしてきたが，心の底ではいつも鹿児島生まれを誇りにしている薩摩隼人の一人である．

その鹿児島の人間が福島へというと，なぜか皆，戊辰戦争を連想するのだろう．住んでみると実際に，戊辰戦争の話をする機会は多い．しかもお酒が入っていることが多く，ほとんど論争になる．必然的に正しい歴史認識に裏打ちされた理論で武装すべくいろいろな歴史の本を読みまくっている．その中の一つに重厚な装丁の大作「福島県立医科大学史」があった．その本の冒頭に戊辰戦争と西洋医術とある．福島医大の歴史をさかのぼれば，明治4年に開設された白河仮病院に行きつくと記載されている．戊辰戦争の中でも激戦の一つに白河城攻防戦がある．薩摩軍の率いていた軍医団（長崎の蘭医ポンペに学んだ医師を頭取とし，慈恵会医科大学を開校した高木兼寛なども従軍していたので有名）は，この白河でも西洋医学の威力をまざまざと見せつけていた．福島の人々は，明治の初頭にその跡地に最初の西洋式病院・白河仮病院を開設し，幾多の歴史を経て，現在の福島県立医科大学へと引き継がれたのである．同史には，私にとってさらに興味深いことが書いてある．白河仮病院は須賀川医学校へと受け継がれ発展してくるのであるが，この須賀川のくだりで，私と因縁のあるシーボルトの名前が頻回にでてくるのである．

福島に赴任して1年，司馬遼太郎風にいう歴史のおもしろさというものをいつも感じていた．今回，W'Waves執筆の機会を利用して，薩摩，西洋医学，戊辰戦争，福島，シーボルトなどをまとめて考察し，教室飛躍への糧としたい．

シーボルトと私

私は医学史と関わって20年以上過ぎた．医学史といってもそのほとんどはシーボルトで

ある．シーボルトを紹介してくれたのは古くからの友人であり，オランダ文化庁と共同でライデンにシーボルト財団を作りあげた秦新二氏である．サンフランシスコに居を構え，日本とヨーロッパ，アメリカを飛び回っている国際人であり，また日本推理作家協会賞を獲ったこともある有名な作家でもある．私は秦氏と共同で，財団の研究員の水口氏にも手助けしてもらい，シーボルトの未公開文書を研究し，オランダ王室よりシーボルトメダル賞を授与されたこともある．シーボルトメダル賞の我が国の最初の受賞者は現在の我が国の最も有名な皇室の方と聞いて私自身驚いたものである．

日本の医学に貢献した西洋人

さて，話をもどそう．日本における西洋医学の発展に貢献した西洋人は誰かといえば，さまざまな人物があげられる．特に幕末から明治初期にかけては西洋人の力を借りることで，医学に限らずさまざまな分野において目覚ましい発展を遂げることができたのだ．先ほど名前をあげたポンペもその一人である．彼はベルギー出身であるがオランダで学び，オランダ海軍軍医として来日して，長崎海軍伝習所の医官として，本格的な西洋近代医学教育を行った人物である．彼の教えを受けた中から多くの人材が生まれている．

ポンペの活躍した幕末より前になるともう少し数は限られてくる．いわゆる「鎖国」の時代に日本に来ることのできる西洋人が限られてしまうからだ．そのなかでも，忘れられないのが，ケンペル，チュンベリー，シーボルトの3人であろう．この3人はともに長崎出島のオランダ商館の医師として来日している．

長崎，出島のオランダ商館は1639年の鎖国以降，日本にとって西洋の情報を取り入れる唯一の場となり，そこは貿易所というだけではなく，文化の交流地，主に日本の外交的な役割を果たす舞台として活躍し続けた．出島の商館に赴任してくる商館長や商館員，そして医師は，幕府にとってだけではなく，多くの医学や自然科学を志す日本人にとっても西洋の最先端の情報や技術に触れるための唯一の手がかりであった．オランダ人とのやりとりを実際に行うのはオランダ通詞であり，彼らは通訳であると同時に，西洋の学問，いわゆる蘭学のオーソリティであり，オランダ語をはじめ，蘭学を教える塾を開く教師でもあった．また，もともとオランダ通詞の家柄であったが，通詞を辞し，外科や薬学を学び，塾を開くものもいた．シーボルト来日当時でいえば，吉雄幸載や楢林栄建・宋建兄弟などが塾を開いており，西洋医学を学ぼうとする者

がそこで学んでいた．蘭学に興味を抱く多くの若者が全国から長崎に集まり，長崎は当時，学問のメッカとなっていた．

ケンペルはドイツ人であるがオランダ東インド会社の医師として2年間長崎に滞在した．その間に商館長に伴って江戸に将軍を訪問し，歴史・政治・経済・社会・地理などに関して日本で見聞したことを「日本誌」「江戸参府紀行」に著した．

チュンベリーはスウェーデン出身の植物学者であるが，やはり医師として来日している．彼は日本の植物を採集・研究し，日本固有の種を多く発見している．帰国後，「日本植物誌」や「日本植物図譜」などを著している．また彼の弟子には桂川甫周・中川淳庵・吉雄耕牛など多くの蘭学者がいる．そして，シーボルトも多くの若者に西洋の学問を教えた人物である．

シーボルトの日本研究

シーボルトは来日後，通詞や出島に出入りを許されていた医師などを通じて患者を治療するようになり，特に内科・外科・眼科・産科などにおいての治療の成功が評判を呼んだ．そして，通詞や医師だけではなく，かねてよりヨーロッパの学問に造詣の深い町年寄高島四郎太夫・久松碩次郎らの働きかけもあり，奉行所の特別のはからいによって，長崎に勉強に来ていた若者たちと出島で会うことができ，しかも通詞や医師が開いていた蘭学塾に出向き講義をする許可も下りることになった．さらに町年寄久松碩次郎，通詞中山作三郎，茂傳之進らの斡旋にて，通詞某名義で長崎校外の鳴滝に土地家屋を手に入れ，自らの塾を持つにいたる．こうしてシーボルトと日本の蘭学者の交流が始まり，それがお互いの研究をすすめるのに大いに役立ったのである．

当時日本で主流であった漢方の医学は代々秘伝として伝えられる閉鎖的なものであった．ところが，シーボルトの教える西洋医学はそれとは大きく違い，シーボルトが実地に手をとり，自らの持つ知識を惜しげもなく，すべて包み隠さず教えていくというやり方であった．特に，それまで日本では行われなかったような外科手術などを生徒たちの目の前で行い，今までは治すことのできなかった病気の治療も行った．また，医学だけではなく，オランダ語や，動物学，植物学，薬学，化学をはじめとする自然科学などあらゆる西洋の学問をシーボルトは講義した．シーボルトは彼の生徒たちにレポートを課した．オランダ語で書かれたそのレポートをシーボルトは丁寧に添削し，清書させ再提出させる．テーマはシーボルトの指示によって，各人異なったものであるが，それぞれの得意分野に合わせたものになっている．それは日本の政治，風俗，習慣，自然，産業など，日本に関するありとあらゆる分野にわたっていた．まさに総合的な日本研究が生徒たちの協力によってすすめられていったのである．

1826年の江戸参府の旅行はシーボルトの日本研究にとってまたとない絶好の機会となった．しかし，シーボルトが江戸参府旅行中の各地で，あるいは長崎屋で手にいれたものの中に禁制品があり，これがもとで，1828年（文政11年）にいわゆる「シーボルト事件」が起きる．シーボルト事件のきっかけとなったのは，シーボルトが高橋作左衛門を通じて間宮林蔵に贈った布と手紙であるという．当時，出島とオランダ人との接触は表向き禁じられて

おり，間宮林蔵が届け出たため，幕府が内偵を進めていたところ，長崎地方を襲った台風によって，オランダ船が座礁し，その船を調べると積み荷の中から禁制の品が出てきたというのである．

シーボルトは高橋作左衛門とのやりとりは幕府も承知しているものと考えていた．そしてこれらは学問的な好奇心から行ったことで，純粋に学問的な日本研究の一環であり，これはシーボルト自身のためだけではなく，日本にとっても有益なものであると確信していた．厳しい取調べの最中でもシーボルトはきちんと記録を残している．取調べや家宅捜索のさいに押収された品物のリストを作成しているのである．押収された日付ごとにまとめられ，また，その後焼却処分になったものと返却されたものとを分類している．

押収された品々のリストには「押収物件一覧」というタイトルがつけられている．中には後に返却されたものもあるが，ほとんどは破棄されてしまったという．例えば現在，東京国立公文書館に所蔵されている「カラフト島図」には「シーボルトの所持品から取り上げたもの」と書かれた紙片が張り付けられている．実際に持ち出したものもいくつかあり，シーボルトはこれらを利用してヨーロッパでは未知のものであった日本とその周辺部分の地図を完成させようとしていたことは明らかである．

また，シーボルトは武器・武具を描いた画帳を持ち帰っている．それだけではなく，実物も持ち帰ろうとしていたのである．これは彼のコレクションの特徴でもある．つまり，一つのテーマについて実物（もしくは模型），スケッチ，文献の三つを手に入るものは必ず揃えていたのである．また，日本人の弟子にそのテーマに関するレポートも書かせている．

これらのリストは，シーボルトの研究対象の範囲の広さをよく表している．地図・武器・武具，風景画・風俗画，衣装，人形，宗教．こうして並べてみると，シーボルトの研究の幅の広さが明らかになる．まさに彼は，日本人の生活そのものをそっくりそのまま持って帰ろうとしていたのではないだろうか．

おわりに

2003年のヒトゲノムプロジェクト完遂により，社会の構造までが変化すると予想されている．医学ももちろん大きく変わり，我々医療従事者もその対応に追われるだろう．しかし，時代はいかに変化しても，真実をサイエンスとして見極めようとするあくなき探求心と努力，そしてその成果の公開など，科学者として人間としての基本的姿勢は不変であろう．逆境の中で日本の近代化に努力してくれた先人たちを，医学史という限られた視点からだけふりかえってみても，これからの教室の将来に関して学ぶべきものは多い．